区民がつくる まちづくり広場

Miyamae Machikyo
No.287
2022.3
編集・発行　宮前区まちづくり協議会

『みやまえの過去・現在・未来～ いまここからあなたと描く～』
第 14 回　まちづくり広場　ラブみやまえ

一人ひとりが異なる社会的背景を持ち共に暮らすまちに、互いに尊重しあい信頼を分かちあうために、今どのような方策があるでしょうか。区制 40 周年を迎える“成熟したまち”宮前区で、眼差し深く過去を見据え未来を拓くことが出来ればと、昨年 11 月「みやまえの過去・現在・未来～いまここからあなたと描く～」をテーマに、宮前区まちづくり協議会主催「第 14 回まちづくり広場ラブみやまえ」がオンラインで開かれました。

第一部は、「みやまえアーカイブス～映像で語る 1960 年代～」と題し、最上川沿いの町、山形県白鷹町で町議会議員などを務めまちづくりに奔走している本木利勝さんが、高度経済成長時代に山形からみやまえに出稼ぎに来ていたおりに撮影した開発風景と出稼ぎの人たちの苦労の映像を編集した記録を上映、また高度経済成長を支えてきた出稼ぎという当時の社会現象について語りました。川崎市民ミュージアムや東急電鉄株式会社所蔵の開発当時の写真も「みやまえ まちのアルバム」として紹介されました。

第二部“みやまえの現在”「宮前楽市」では、現在このまちで様々なまちづくり活動をしている 24 団体にインタビューが行われました。

第三部では、宮前区出身ながらまちを出て、東北芸術大学コミュニティデザイン学科でまちづくりを学んでいる川合佑汰さんが山形から登壇。“大切にしたい人を大切にしていたらいい未来が待っている気がする”と、信頼とコミュニティ創成について話しをしました。

また、特別ゲストとして土橋在住の作家小倉美恵子さんが、開発当時のみやまえの風景をナレーションとともに『幻燈ものがたり』としてまとめた映像を披露し、アスファルトの下に眠る原風景に未来を拓く手がかりがあるのではと語りました。引き続いて『みやまえ未来語り』と題して簸本亜里まちづくり協議会理事長の進行により、本木さん、川合さん、小倉さんをまじえて三世代三者による過去から未来へつなぐ対話がなされました。

みやまえのモノクロの原風景の視界が各講演者によっておしひろげられ、新しい未来のあり方が見えてきました。

今月号の主な内容

1 面　・特集：第 14 回まちづくり広場ラブみやまえ
2 面・3 面
　・特集：「過去」「未来」「過去から未来へ」
4 面　・特集：「現在」　令和４年度活動支援金申請団体募集　編集後記

次号予告

次号は、３月 12 日に開催される「農フォーラム」の特集です。宮前区の農家さん達の取り組みも紹介します

【現在】 市民活動団体紹介インタビュー 宮前楽市

多様性と共創の現在

谷戸の丘陵地に造成されつくられた郊外都市、それぞれの過去物語を背負ったさまざまな人々が、宮前のこの地を選び、新たな暮らしを始めました。仲間をつくり、つながり、結び合って、多様な活動も創り続けています。

そんな中から 24 の市民活動団体が宮前楽市団体紹介インタビューに参加しました。

人が好き・緑が好き・まちが好き

子育て中の人、得意を生かす人、シニア世代、福祉、健康、歴史、平和、教育、学習、音楽、芸術、お話し、ハンドメイド、などなど。

好きや思いを生かす多種多彩な活動。

影響し合い、育て合い、ワクワクし合って、古くからの住人も、新住民も宮前のまちを一緒に創っています。

そんな　彼ら、あなた、と私。

そして再度問いかけます。

いまここから　あなたと描く　未来とは

NO	団体名
1	神奈川県年金受給者協会　宮前分会
2	静雅書道会　三矢・愛書道教室
3	市民コンシェルジュの会
4	ずっとやりたかったことをやる会
5	いぬくら子ども文庫
6	ニッポン・アクティブライフ・クラブ（ナルク川崎）
7	宮前区運動普及推進員の会
8	宮前区赤十字奉仕団
9	宮前区観光ガイドの会
10	みやまえ・東部 62 部隊を語り継ぐ会
11	みやまえエコー
12	みやまえ江戸古文書を読む会
13	こがも会
14	コーロ・ディ・ミモザ
15	原水爆禁止宮前区協議会
16	白井志津子とクレイアートグループ
17	宮前九条の会
18	息・活・音
19	NPO 法人 WE21 ジャパンみやまえ
20	cha cha chat～茶々茶処～
21	宮前区歴史文化調査委員会
22	栄養士みやまえ応援団
23	宮前区食生活改善推進員連絡協議会
24	ボーイスカウト川崎第 49 団

ラブみやまえ当日の模様は、フォトコンテスト会場とアリーノでパブリックビューイングされました。

令和４年度活動支援金申請団体募集

宮前区まちづくり協議会では、区内でまちづくりに関連した市民活動を行っている団体に対して、活動が活性化し、広がり、自立していくことを目的として活動資金の一部を支援しています。団体の活動状況に応じて３種類のコースがあります。活動を始めたばかりの団体も、継続応募する団体も、まずはお問い合わせください。

申請締切：４月 22 日

電話：856-3125（区地域振興課）

まちづくり広場へのご意見・ご感想はこちらまで

（事務局）宮前区役所地域振興課
電話　856-3125
ＦＡＸ　856-3280
E-MAIL　69tisin@city.kawasaki.jp
HP アドレス　http://miyamae-matikyo.com/

【　編集後記　】

最近、夕焼け空の色の美しさに感動する。年齢かな？と思う事もあるが大気の違いがあるのだろうか？無論朝日の色も美しいのだろうが寝ぼすけの私は見ることがない。また、夕暮れ時の日差しの強さ、眩しさに目を細めて車の運転をしているがサンバイザーを下ろしても、視界の限界を感じるほど、今後はこの日差しは少なくなる事はないのだろう。日よけ、紫外線よけを兼ねたサンバイザーを開発してほしい。（A.H.）

【過去】 みやまえアーカイブス ～映像で語る 1960 年代～

2021 年春、55 年前の宮前のスライド写真や音声を記録した一本のオープンリール・テープ等一式が、山形県白鷹町の町役場で見つかりました。記録した本人も忘れていたという、当時 22 歳の眼が見た田園都市開発時の等身大の記録です。作者は本木勝利さん。かつて実家の農家を出てこのまちに“出稼ぎ”に来ていた青年は、その後町会議員を 10 期務め、最上川のまちづくりに関わる 76 歳になっていました。

本木さんとオンラインで打ち合わせを重ね、当日はあらたに 16 分強に編集された作品「出稼ぎ」を上映。飯場での生活、仲間が現場で倒れ救急車で有馬病院に運ばれるシーン、皆が給料を送金する馬絹郵便局、長坂下のバス停で現場に行くためにバスに乗り込む労働者、草むらにうち捨てられた鳥居、工事が進められている崖の下で立ち退きを拒む民家、宮前平と宮崎台の間にできた八幡橋など、半世紀前東京オリンピック直後の 1966 年頃、みやまえの開発のために出稼ぎに出てきた白鷹町の人たちの苦労の記録でした。

日本の高度経済成長を支える社会現象であった『出稼ぎ』の歴史的背景を語る本木さんの眼差しは、同時に、開発のもとに鋭角的にきりとられていく褐色の大地の風景のなかで生きるみやまえの地元の人々にも向けられており、埋もれてしまった宮前のもととなる過去を見据えた胸をうたれる記録でもありました。「出稼ぎ」は映画化が決定され、現在の宮前の風景やインタビューもあらたに編集されて 2022 年春に公開予定とのこと、楽しみです。

なおプログラム後半の『未来語り』では、今日まさに 22 歳の川合さんと対話の場面も。「かつて山へ薪を取りに行くのにも若い人と年を取った人との強い信頼関係があった。今は競争の原理が農村にも広がって、疲弊して過疎もすすみ、その結果鳥獣も増えてしまった」と半世紀を振り返り、まちづくりにおいて信頼関係を築く重要性を語ってくれました。

【未来】 みやまえ未来語り ～自分の周りで大切にしたい人を大切にしていたら　いい未来が待っている気がする～

東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科４年生、宮前区出身の川合佑汰さんが、山形からオンラインで『みやまえ未来語り』と題した講演をしました。

コミュニティの力が衰退しつつあるなかで、人と人のつながり方やその仕組みをデザインすることがコミュニティデザイン。川合さんは鳥獣被害の課題を地域で解決できる手立てを研究する卒業研究で、猟友会などの人々とコミュニュケーションを取りながら従来の文化に若者の文化をとりこもうとしています。

また、１年間休学して過疎のまち島根県雲南市に移住し、地域とはどういうものなのかも学びました。ちなみに川合さんが学んだ雲南コミュニティキャンパスは、日本全国から学生たちを集め、若者たちが挑戦する地域課題の学びのフィールドとなっています。

これらの活動から、住民の日常に寄り添うことで自分を知ってもらう、相手のことを知る、そして信頼を得ていく過程の大切なことを川合さんは知りました。

「コミュニティ醸成のためにはどんな方法があるか。まず自分の身近に存在する人を大切にする行動そのものがコミュニティを強くする。そして自分から積極的に話しかけをしてみること。話しかければきっと相手は応じてくれます。これがコミュニティ醸成のきっかけになります。この両方を積極的に行えば必ずそこにコミュニティが成立するはずです。その結果、そこには信頼関係が生まれ、継続性のあるコミュニティとなるはずです。」

“自分の周りで大切にしたい人を大切にしていたら、いい未来が待っている気がする”と川合さんは強調しました。

まちに愛着を持つことや、帰属意識を持つこと、そして自分から近づいていくことが、まちづくりやコミュニティ醸成に必要なのでしょう。

【過去から未来へ】 アスファルトの下に眠る未来への手がかり

「谷戸の下」という屋号の茅葺の家で生まれ育ち、今でも土橋に根付いている住民の相互扶助と信仰の集まりである御嶽講をとりあげた著書『オオカミの護符』。同名の映画を制作した小倉美恵子さんが、第一部の本木さんの映像作品への相聞として開発前の宮前の写真にナレーションをつけた『幻燈ものがたり』を発表。それぞれの土地には積み上げられた文化がある、それを受け継いで現代化していくことが大切なのではと提言しました。

小倉さんが幼少の頃、50 年ほど前の土橋は、美しい谷戸がたくさんあり、山にはナラ・クスノキ・カシが生え、落ち葉はたい肥となり、枝や木は薪や炭となり、清らかな水も湧き出ている所でした。親が茅葺の家の間取りをそのままにした大きな家を建てましたが、家はプライベートな空間と同時に地域の人たちの公の空間でもありました。

ダンプカーでそんなまちの山が削られ、自分の遊び場が無くなっていくのを見て、「帰れ！」と食ってかかったりしたのを小倉さんは覚えています。その一方、出稼ぎに来ていた人たちとも仲良くなり家に来てもらったりもしました。本木さんと同じ東北や信州出身の人たちでした。

開発が進み、土地に根付いている文化を通り越して新しい人たちがどんどん入ってきました。今の土橋は約 7,500 世帯、当時の 150 倍にもなりました。

「だからと言って昔に戻りたいわけでもないし、さりとてこのまま進んでいきたくもありません･･･。

宮前区の原風景やもともとの生活もわからなくなりつつある今、ぜひそれらを伝えておきたいと思うのは、そこに未来を拓く手がかりがあるからです。このアスファルトの下に眠る未来への手がかりを掘り起こし、現代に通用する表現に翻訳しなおして対話を続けていきたいと思います」と、小倉さんは過去から未来への展望を語りました。